

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター(Cedep)・
ベネッセ教育総合研究所 共同研究
「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクト

乳幼児の生活と育ちに 関する調査 2017

0-1歳児編

東京大学Cedepとベネッセ教育総合研究所は、
子どもの成長のプロセスを明らかにするための
縦断調査(追跡調査)を共同で始めました。

本冊子は、第1回調査の主な結果をまとめたものです。



目次

- 1. 妊娠・出産前後の母親・父親の意識や行動… 6
- 2. 0-1歳児の生活や発達…………… 8
 - ・生活リズム
 - ・遊びやメディア
 - ・発達

3. 0-1歳児の母親・父親の子育て意識、生活 …… 11

- ・子ども・子育てに対する意識
- ・子育てで頼りになる人
- ・生活時間
- ・心身の負担感など
- ・夫婦関係
- ・幸福感
- ・父親の労働・職場環境
- ・子どもをもつ予定
- ・社会に対する評価・要望

■研究プロジェクトの目的

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）とベネッセ教育総合研究所は、乳幼児の生活や発達について縦断的に研究するプロジェクトを共同で進めています。このプロジェクトは、子どもの生活や保護者の子育ての様子を複数年にわたって調査し、それらが子どもの成長・発達とともにどのように変化するのかを明らかにします。これにより、よりよい子育てのあり方や家庭でのかかわり方について検討することを目的としています。

■研究プロジェクトの特徴

1. 子どもの生活や発達、保護者の子育ての「今」をとらえることができる

このプロジェクトでは、2016年度に生まれた子どもをもつ保護者（調査モニター）に対して、毎年1回継続して調査を実施します。これにより、子どもの生活や発達、保護者の子育ての実態などの「今」の様子を明らかにできます。

2. 子どもの成長・発達の「プロセス」をとらえることができる

このプロジェクトでは、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また保護者のかかわりや意識はどのように変化したり、子どもの成長・発達に影響を与えたりするのかといった、親子の成長・発達の「プロセス」や因果関係を明らかにできます。

3. 母親・父親の意識や養育行動について幅広くとらえることができる

調査実施にあたり、調査票を世帯単位で配布して、「主となる養育者」と「副となる養育者」に回答を依頼しています。そのため、養育行動や子ども・子育てに対する意識について、養育者2名（主に母親・父親）の共通点や相違点を幅広くとらえることができるとともに、夫婦関係が子どもの成長・発達に与える影響なども明らかにできます。

■研究プロジェクトのメンバー

●プロジェクト代表者

秋田 喜代美（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）センター長・教授）

谷山 和成（ベネッセ教育総合研究所 所長）

●プロジェクトメンバー

遠藤 利彦（東京大学 Cedep 副センター長・教授）

野澤 祥子（東京大学 Cedep・准教授）

佐藤 香（東京大学教授）

島津 明人（北里大学教授）

小崎 恭弘（大阪教育大学准教授）

宇佐美 慧（東京大学准教授）

大久保 圭介（東京大学大学院博士課程）

木村 治生（ベネッセ教育総合研究所 主席研究員）

高岡 純子（ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室 室長・主席研究員）

真田 美恵子（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）

持田 聖子（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）

調査概要

●方法：郵送法(自記式質問紙調査)

●時期：2017年9月～10月

●対象：2016年4月2日～2017年4月1日生まれの子どもをもつ家庭 3,205世帯(調査モニター)

発送数		有効回収数	有効回収率
3,205	主となる養育者	3,005 (うち母親 2,975)	93.8%
	副となる養育者	2,750 (うち父親 2,625)	85.8%

※本研究プロジェクトの調査モニターの世帯に調査票を配布した。調査モニターは、全国の対象月齢の子どもリストから、全国7地域の出生数の比率(厚生労働省「人口動態統計」2016年度)に応じて抽出した「調査モニター募集対象者」に対して、2017年7月～8月にかけて募集した。

※調査では子どもの「主となる養育者」と「副となる養育者」に回答を依頼した(「主となる養育者」のみの回答も可とした)。誰を「主」「副」とするかは、回答者に委ねた。

※調査時点で、子どもの月齢は0歳6か月～1歳5か月であった。

※回収した調査票のうち、月齢が不明な票を除いた。

「主となる養育者」「副となる養育者」の(子どもからみた)属性

		副となる養育者							合計
		母親	父親	祖母	祖父	その他	無答不明	未回収	
主となる 養育者	母親	0	2,624	58	4	3	34	252	2,975
	父親	24	0	0	0	0	0	3	27
	祖母	1	0	0	1	0	0	0	2
	無答不明	0	1	0	0	0	0	0	1
合計		25	2,625	58	5	3	34	255	3,005

本冊子では、「主となる養育者」と「副となる養育者」の組み合わせとして最も多かった母親、父親(■部分)について報告する(母親2,975、父親2,624)。

●地域：全国

●主な調査項目：子どもの気質、アタッチメント、発達、生活時間、習い事、養育者の養育行動、子育ての悩み、配偶者との関係性、生活時間、家事・子育ての分担比率、妊娠・出産前後の気持ち、子育てで頼りになる人、親性、幸福感、抑うつ、家事・子育て等の負担感、子育てしやすい社会にするために必要だと思うこと、社会に対する評価、これから子どもをもつ予定

●データを読む際の注意点

- ①図表内の()はサンプル数を示している。
- ②図表で使用している百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。
- ③図表内の月齢区分は、調査対象の子どもの月齢を3区分したものである。低月齢は0歳6か月～0歳9か月、中月齢は10か月～1歳1か月、高月齢は1歳2か月～1歳5か月である。
- ④子どもの生活や発達、世帯年収は「主となる養育者」にたずねたため、母親の回答を分析している(図表中に「母親の回答」と明記)。

*本調査は東京大学ライフサイエンス委員会倫理審査専門委員会の倫理審査の承認を受け、実施している。

基本属性（子ども・世帯）

●子どもの性別



※ 母親の回答

●子どもの出生順位

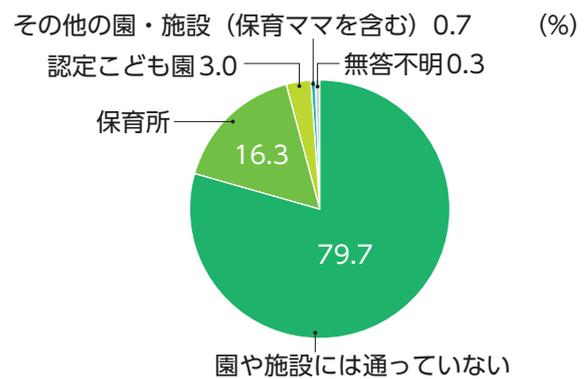


※ 母親の回答

●子どもの月齢(調査時点)

月齢	割合 (%)
6か月	7.8
7か月	6.3
8か月	8.6
9か月	9.3
10か月	8.4
11か月	10.3
1歳0か月	9.2
1歳1か月	8.7
1歳2か月	7.9
1歳3か月	8.2
1歳4か月	7.8
1歳5か月	7.5

●子どもの就園状況



※ 母親の回答

※ 保育所には認可外保育施設、小規模保育室を含む

●居住地(人口規模別の区分)



●世帯年収

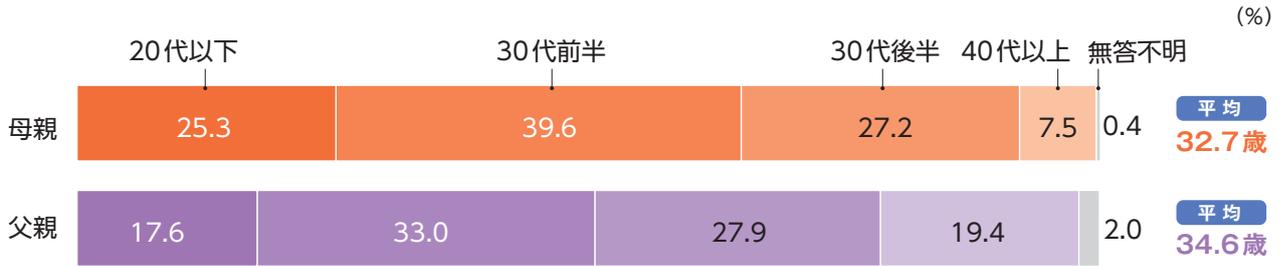


※ 母親の回答

※ [400万円未満]は「200万円未満」+「200～300万円未満」+「300～400万円未満」。[800万円以上]は「800～1000万円未満」+「1000～1500万円未満」+「1500～2000万円未満」+「2000万円以上」

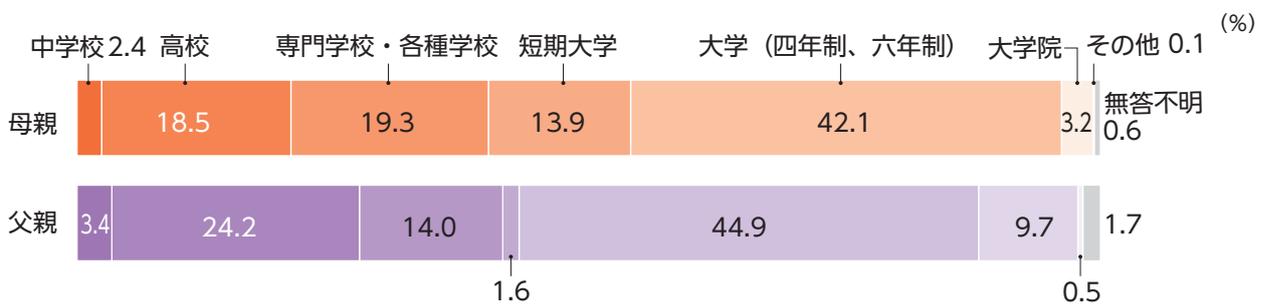
基本属性（母親・父親）

●年齢

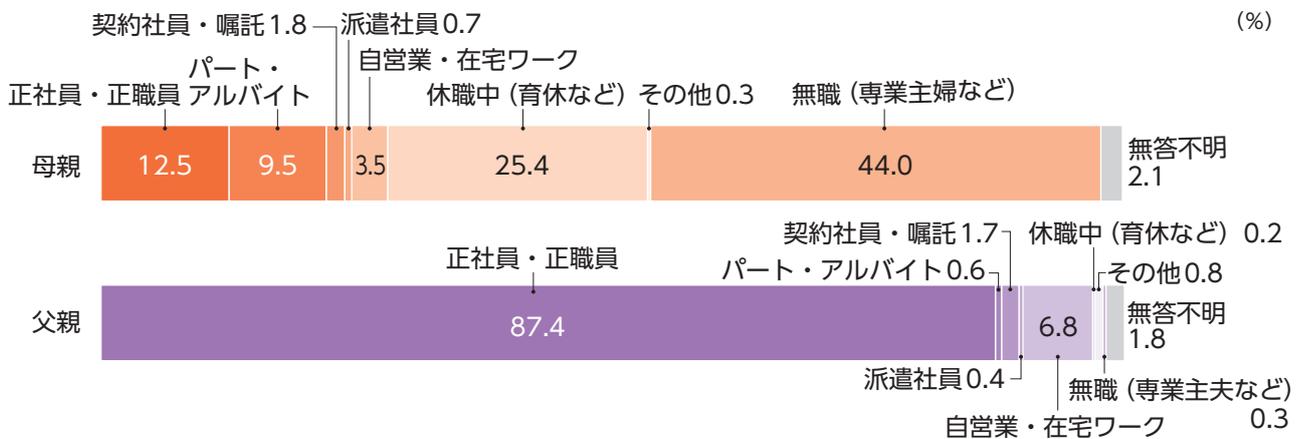


※ 平均は無答不明を除いて算出

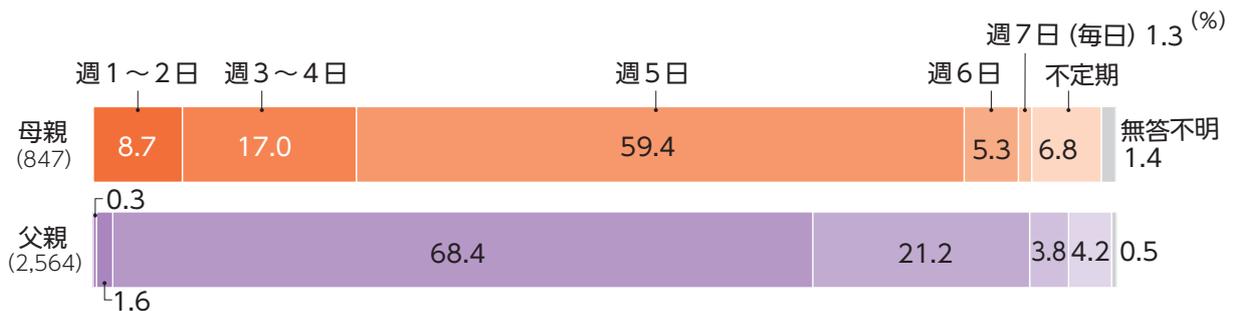
●最終学歴



●就労状況



●有職者の週あたりの労働日数



※ 「休職中」「無職」を除く、就労している人のみ

1. 妊娠・出産前後の母親・父親の意識や行動

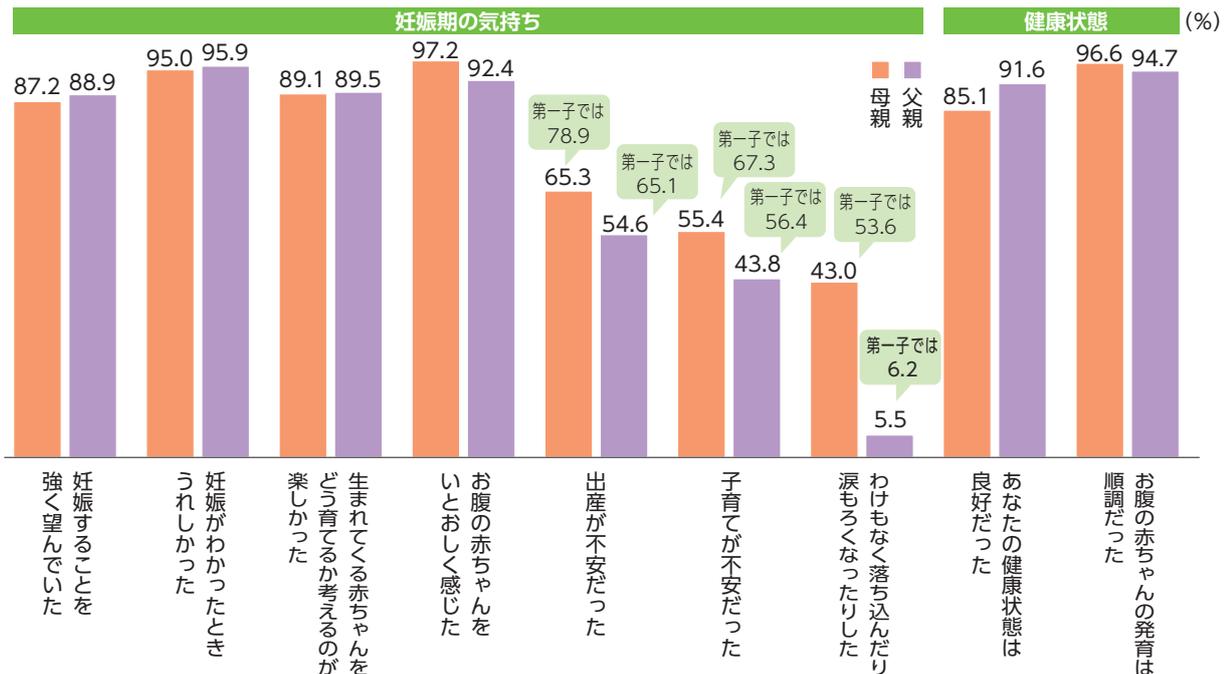
妊娠はうれしいが子育てには不安も。妊娠期の情報収集は母親が85.4%、父親が53.8%。

対象の子どもの妊娠について、9割以上の母親・父親がうれしさを感じるなど前向きな気持ちをもっていた。一方で、出産に対する不安は母親の65.3%、父親の54.6%、子育てに対する不安は母親の55.4%、父親の43.8%が感じていた(図1-1)。「本や雑誌、インターネットなどで出産・子育ての情報を集めた」のは母親の85.4%、父親の53.8%であった。妊娠中に飲酒、喫煙をしていた母親はほとんどおらず、生活習慣に配慮していた様子がうかがえる(図1-2)。



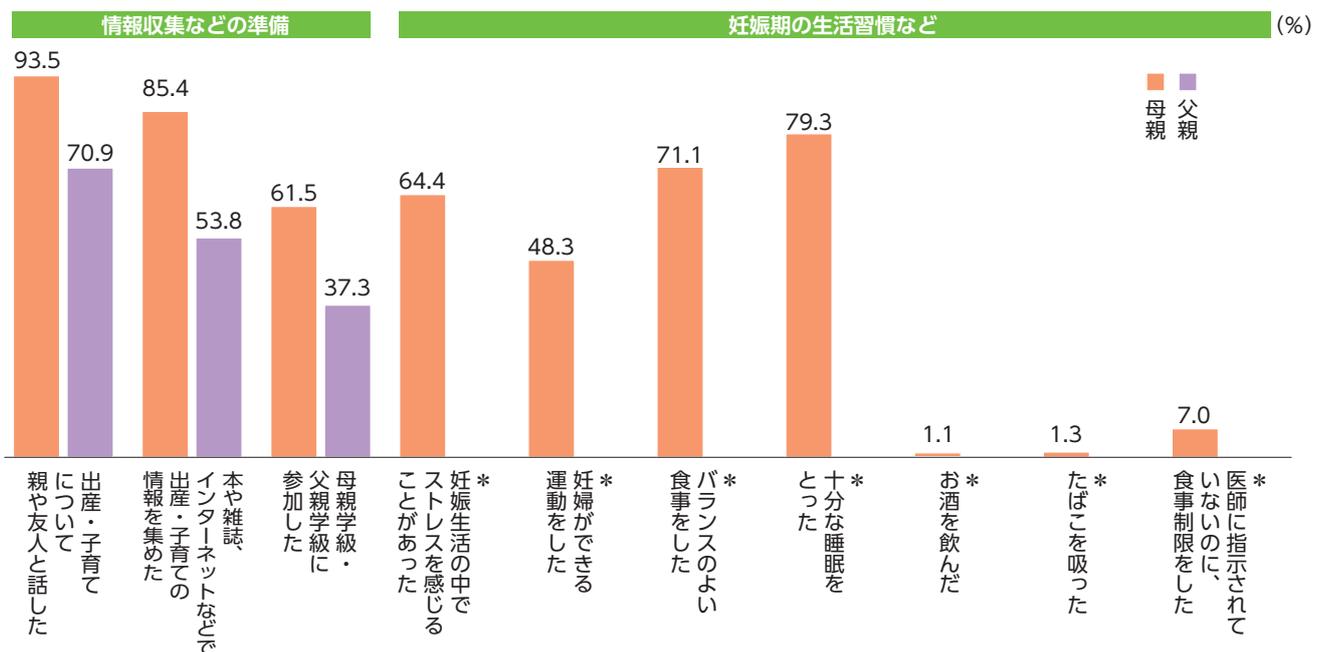
対象のお子様の出産前後の、あなたの気持ちや行動についてうかがいます。

図1-1 妊娠期の気持ち、健康状態



※ 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」

図1-2 出産・子育てに向けた準備、生活習慣など



※ 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」 ※ *の項目は母親のみ分析

出産後は、母親の約7割、父親の約6割が「子どもの世が大変だった」。

妊娠中に「赤ちゃんをどう育てるか配偶者と話し合った」夫婦は8割弱、「配偶者(子どもの父親)は妊娠生活を支えてくれた」と感じる母親は85.3%であった(図1-3-1)。配偶者が妊娠生活を支えてくれたと感じている母親は、子どもの出産後も「配偶者と子育てや家事をよく助け合っている」と感じる傾向がある(図1-3-2)。また母親の65.1%が「出産の間、幸せな気持ちがあった」が、出産後は6割台の母親が「子どもの世が大変だった」「家事が大変だった」「身体の疲れがとれなかった」と回答している。特に第一子の母親は、より「子どもの世が大変だった」と感じている(図1-4)。出産の様式は80.9%が自然分娩である。40代以上では、約3人に1人が帝王切開で出産している(図1-5)。

図1-3-1 妊娠期の配偶者との関係性

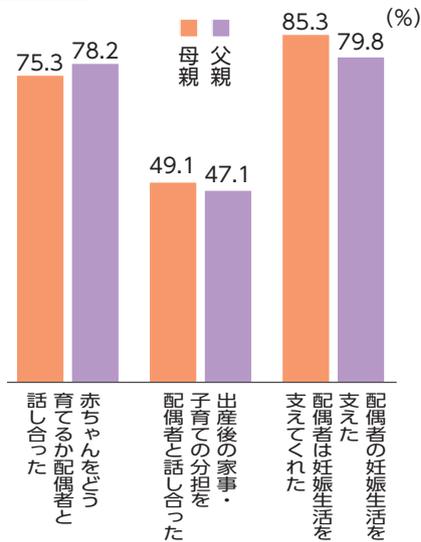


図1-3-2 「配偶者と子育てや家事をよく助け合っている」(母親)

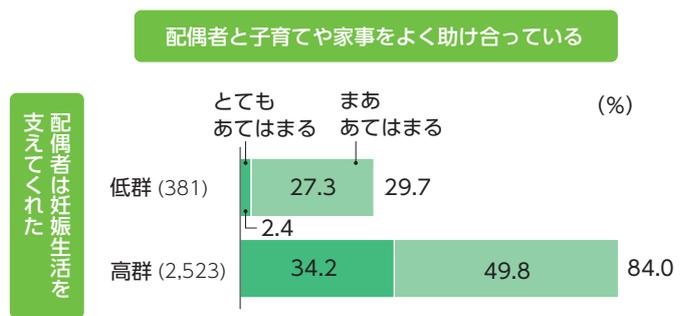
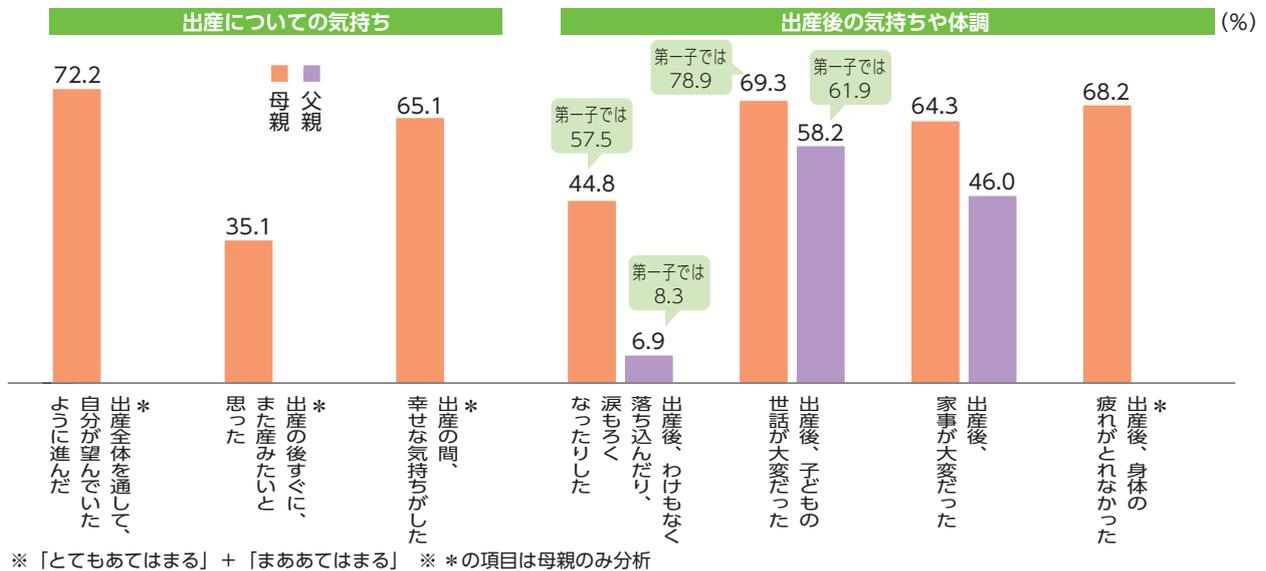


図1-4 出産時・出産後の気持ちなど



Q 対象のお子様の出生時について、差し支えない範囲で教えてください。

- 在胎週数 平均 38.8 週
 - 出生時に治療を受けた(光線治療など) 18.9%
 - 出生時の体重 平均 3009.8 グラム
- ※ 母親の回答 ※ 平均は無答不明を除いて算出

図1-5 出産の様式(母親の年代別)



2. 0 - 1 歳児の生活や発達

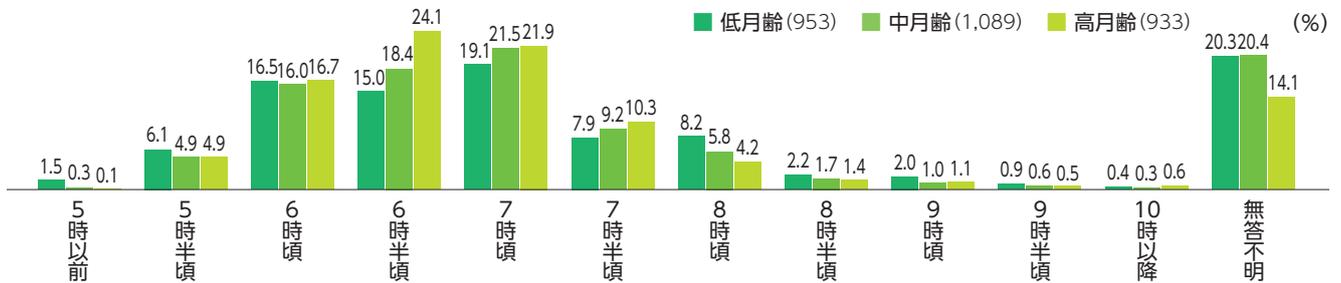
生活リズム

0 - 1 歳児は、生活リズムの個人差が大きい。高月齢では、起床は「6時半頃」、昼寝は「2時間くらい」、就寝は「21時頃」をピークにしたゆるやかな分布となる。

0 - 1 歳児の起床時刻・昼寝の時間・就寝時刻は他の項目に比べて「無答不明」が1 - 2割と高い(図2-1-1~3)。これは、子どもの生活リズムがまだ整っていないために時間帯を選択できなかったとも考えられる。起床時刻は低月齢では「6時頃」「6時半頃」「7時頃」が1割台ずつであり、分布の中心となる時間帯がみられない。高月齢になると「6時半頃」が24.1%となり、ゆるやかに分布の中心をなしている。こうした傾向は昼寝の時間、就寝時刻も同様である。背景として、高月齢になるにつれて生活リズムが整っていくことと、就園率の高まりとともに、園生活に合わせた時間で生活する子どもが増えることが考えられる。

Q 対象のお子様は平日、何時頃に起きますか。

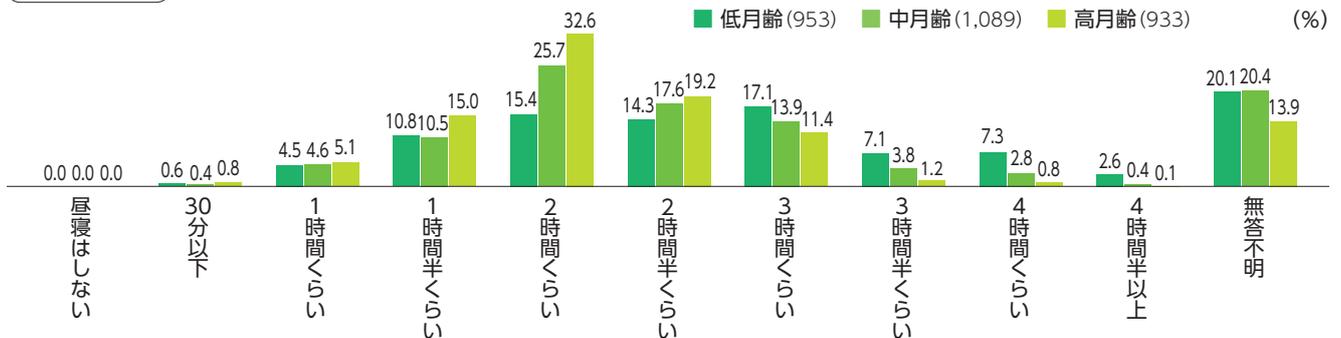
図2-1-1 起床時刻(月齢3区分別)



※ 月齢区分の低月齢は0歳6か月~0歳9か月、中月齢は10か月~1歳1か月、高月齢は1歳2か月~1歳5か月である ※ 母親の回答

Q 対象のお子様は平日、どれくらい昼寝をしますか。(夜間以外の睡眠を合計してください)

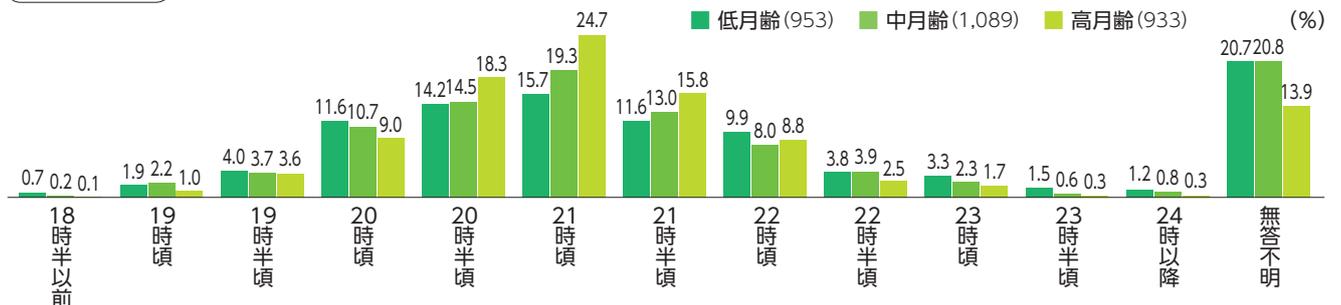
図2-1-2 昼寝の時間(月齢3区分別)



※ 月齢区分の低月齢は0歳6か月~0歳9か月、中月齢は10か月~1歳1か月、高月齢は1歳2か月~1歳5か月である ※ 母親の回答

Q 対象のお子様は平日の夜、何時頃に寝ますか。

図2-1-3 就寝時刻(月齢3区分別)



※ 月齢区分の低月齢は0歳6か月~0歳9か月、中月齢は10か月~1歳1か月、高月齢は1歳2か月~1歳5か月である ※ 母親の回答

半数以上の家庭で、絵本の読み聞かせは1日「15分間くらい」している。スマートフォンの利用は2割以下である。

子どもと、外遊びや絵本の読み聞かせ、メディアの利用を平日にどれくらいの時間しているかをたずねた。「外で遊ぶ(お散歩を含む)」は、約7割が「1時間くらい」までである。「紙の絵本や本」の読み聞かせは「15分間くらい」が5割であり、高月齢になると「30分間くらい」以上が増える。「テレビやDVD」は中月齢で「1時間くらい」「2時間以上」が合わせて51.0%となる。「スマートフォン」は高月齢で「15分間くらい」が12.5%と中月齢までよりやや増えるものの、使っていない家庭が8割以上である。

Q

対象のお子様と平日に、以下のことをしたり、見たり、使ったりする時間は、1日だいたいどれくらいですか。

図2-2 外遊び、読み聞かせ、テレビやDVDを見る時間など(月齢3区分別)



※ 「0分」と無答不明は省略

※ 「2時間以上」は「2時間くらい」+「3時間くらい」+「4時間以上」。「30分間以上」は「30分間くらい」+「1時間くらい」+「2時間くらい」+「3時間くらい」+「4時間くらい」

※ 月齢区分の低月齢は0歳6か月～0歳9か月、中月齢は10か月～1歳1か月、高月齢は1歳2か月～1歳5か月である

※ 母親の回答

社会性にかかわる発達には、特定の月齢でよくみられるものや月齢による変化があまりないものもある。

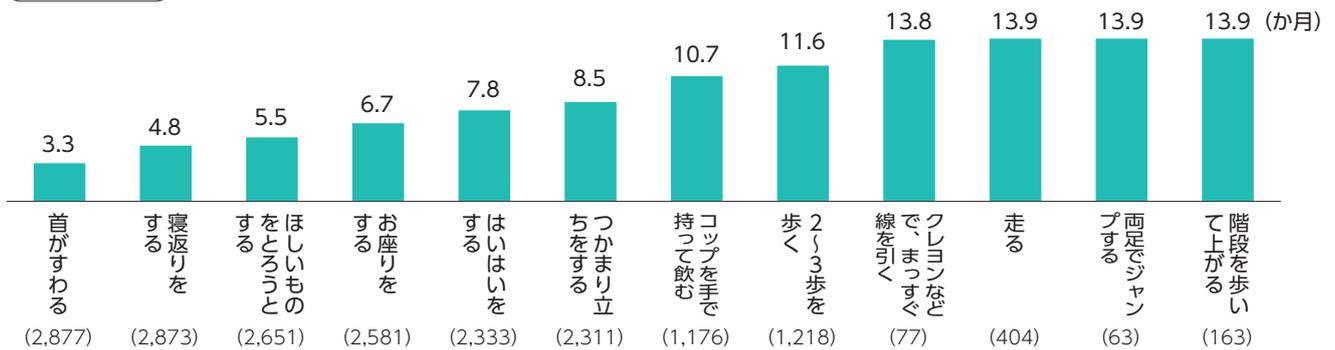
2.

0-1歳児の生活や発達

0-1歳児の運動発達について、初めてできた月齢の平均は「首がすわる」3.3か月、「はいはいをする」7.8か月、「2-3歩を歩く」11.6か月などであった(図2-3-1)。言葉にかかわる発達では、「『バイバイ』や『さよなら』の言葉に身ぶりで反応する」のは低月齢の6.0%から中月齢では51.1%に大きく増える(図2-3-2)。社会性にかかわる発達の「身ぶりをまねする」は低月齢7.3%から中月齢49.3%へと増える。「あなたの後を追う」は、中月齢が75.9%ともっとも高く、高月齢では68.8%へやや減少する。「人見知りをする」は月齢による変化はあまりみられない(図2-3-3)。

Q 対象のお子様の発達や普段の様子について、あてはまる番号に○をつけてください。「できる」に○をつけた場合は、最初にそれができた月齢を覚えている範囲でお書きください。

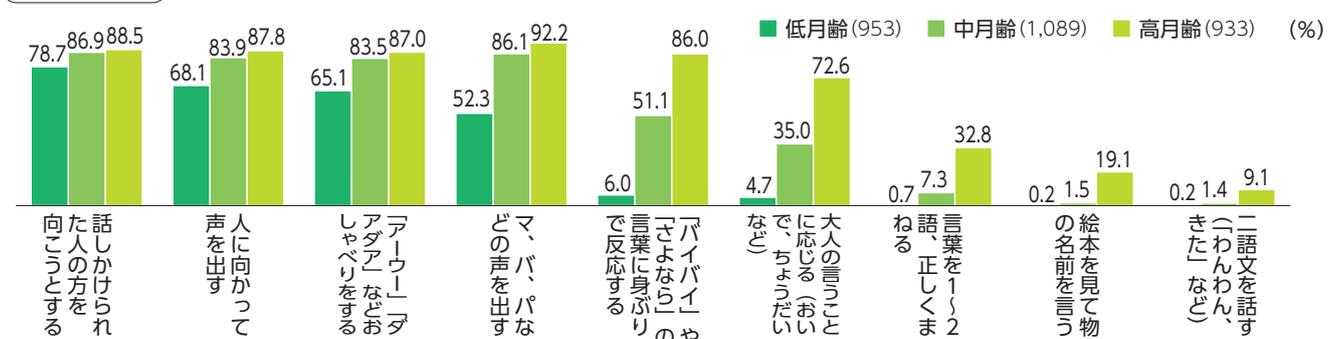
図2-3-1 初めてできた月齢の平均(運動発達)



※「できる」人のみ分析 ※ 平均は無答不明を除いて算出 ※ 母親の回答

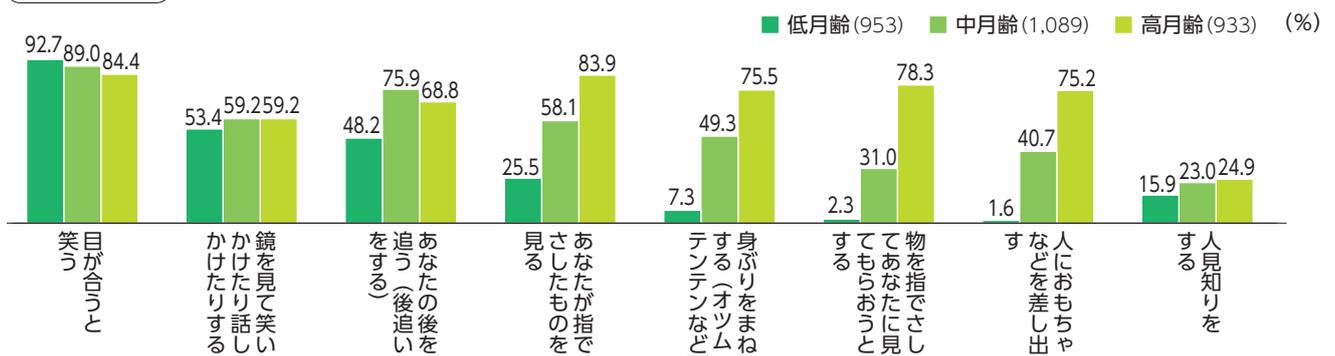
Q 対象のお子様の発達や普段の様子について、あてはまる番号に○をつけてください。

図2-3-2 言葉にかかわる発達(月齢3区分別)



※「よくする」 ※ 月齢区分の低月齢は0歳6か月~0歳9か月、中月齢は10か月~1歳1か月、高月齢は1歳2か月~1歳5か月である ※ 母親の回答

図2-3-3 社会性にかかわる発達(月齢3区分別)



※「よくする」 ※ 月齢区分の低月齢は0歳6か月~0歳9か月、中月齢は10か月~1歳1か月、高月齢は1歳2か月~1歳5か月である ※ 母親の回答

3. 0 - 1 歳児の母親・父親の子育て意識、生活

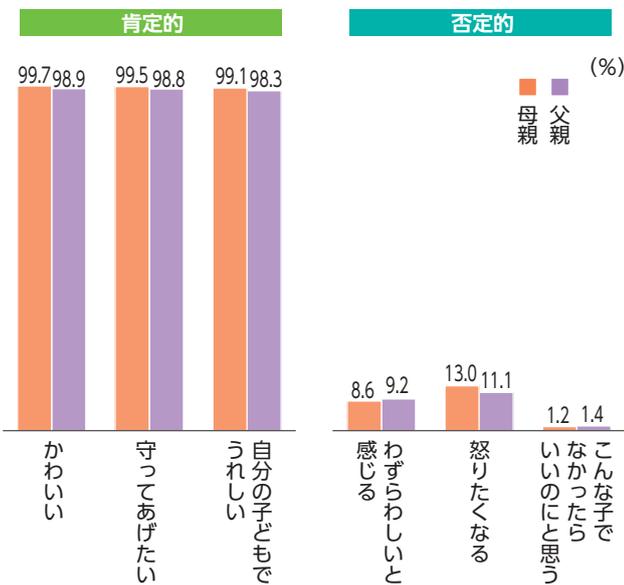
子ども・子育てに対する意識

母親・父親のほぼ100%が、子どもは「かわいい」。一方で、4～5割は「子どもがうまく育っているか不安になる」。

母親・父親のほぼ100%が、子どもを「かわいい」「守ってあげたい」など、肯定的な気持ちをもっている(図3-1-1)。一方で、「子どもがうまく育っているか不安になる」という気持ちも、母親の51.9%、父親の42.1%にある(図3-1-3)。子どもの教育や将来については、6割台の母親・父親が「早いうちから文字や数を学ばせたい」と考えている(図3-1-2)。

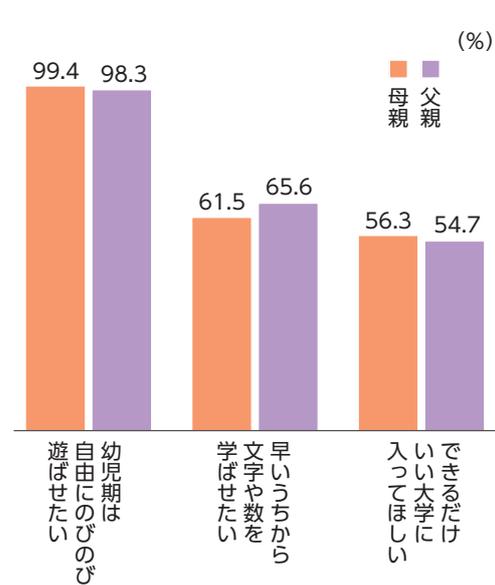
Q 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図3-1-1 子どもに対する気持ち



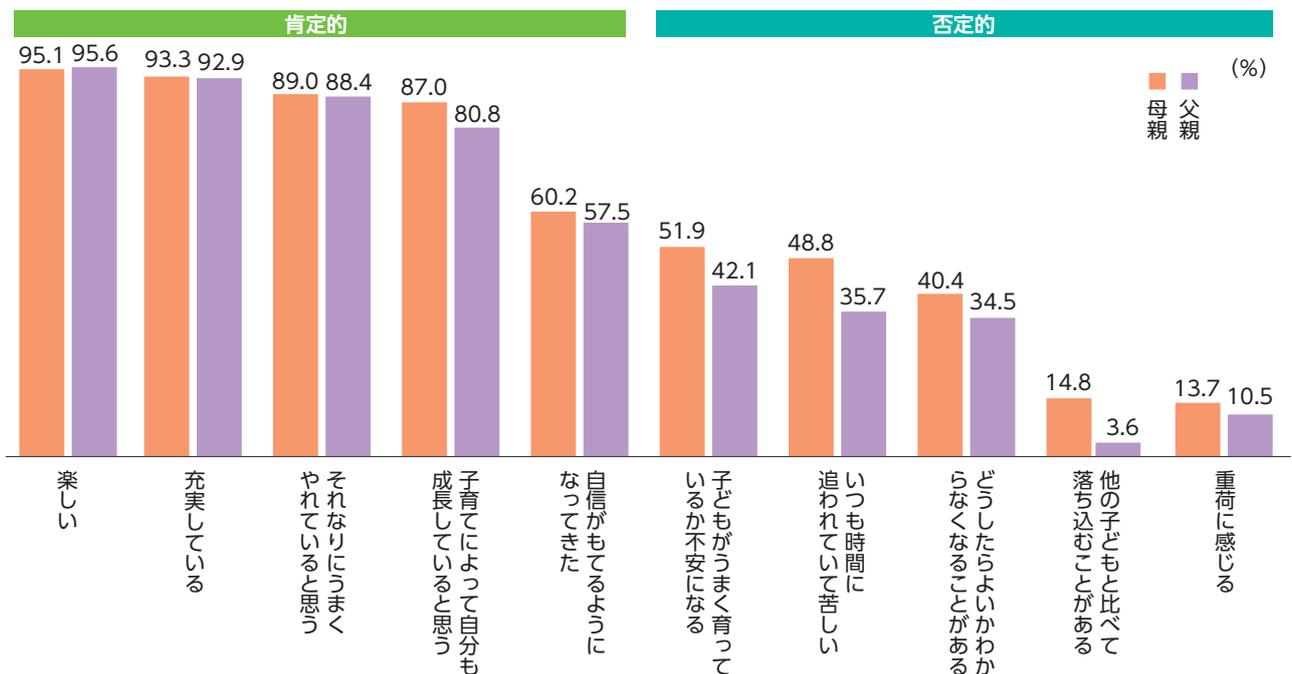
※ 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」

図3-1-2 教育や将来について



※ 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」

図3-1-3 子育てに対する気持ち



※ 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」

母親の子育ての悩みは、上位から「離乳食・幼児食の与え方」「子どもへの接し方」「夜泣き」。子どもの月齢とともに、悩みは変化する。

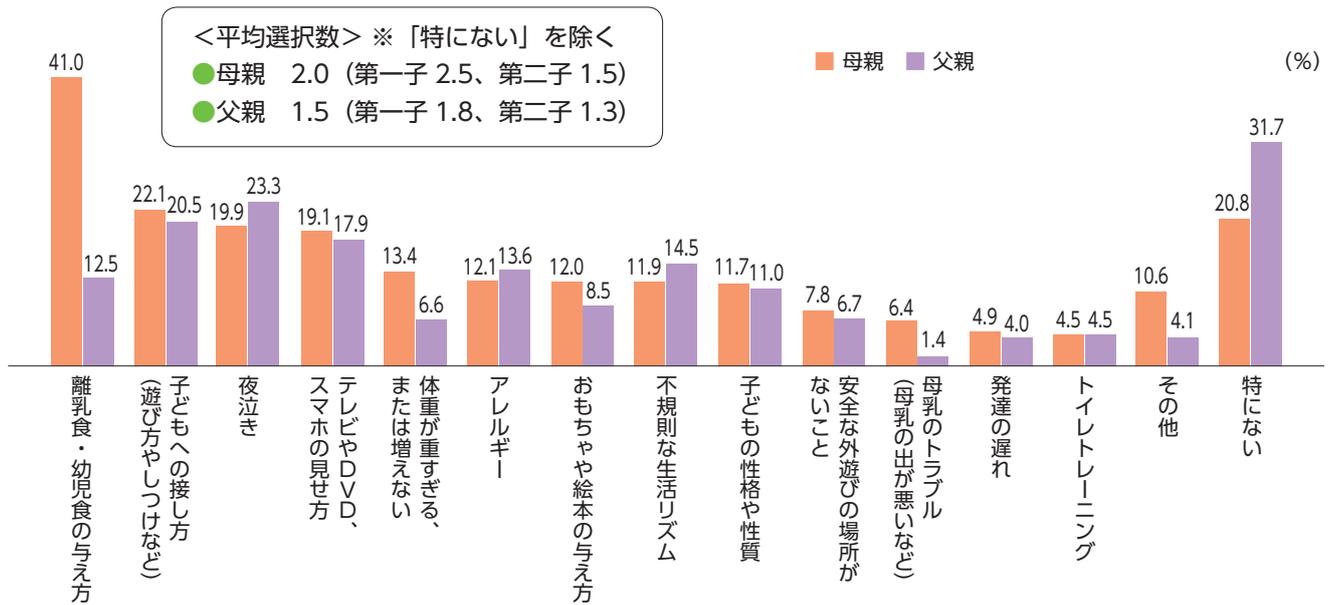
子育ての悩みについて複数回答でたずねたところ、母親の20.8%、父親の31.7%が「特にない」であった。それを除くと、母親の悩みは上位から「離乳食・幼児食の与え方」(41.0%)、「子どもへの接し方」(22.1%)、「夜泣き」(19.9%)である(図3-2-1)。月齢が高くなるほど増える母親の悩みが「トイレトレーニング」「子どもの性格や性質」「子どもへの接し方」「テレビやDVD、スマホの見せ方」であり、月齢とともに減る悩みが「母乳のトラブル」「離乳食・幼児食の与え方」である(図3-2-2)。また、対象の子どもが第一子の母親で、より悩んでいる比率が高い傾向もみられた(図3-2-3)。

3.

0-1歳児の母親・父親の子育て意識、生活

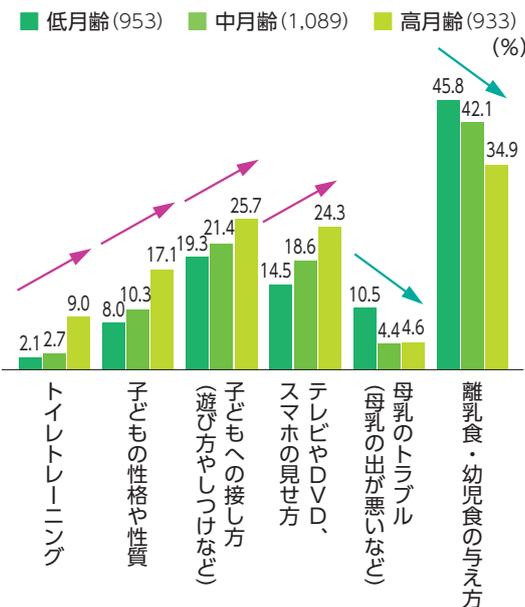
Q 対象のお子様の子育てで、あなたが悩んでいることはありますか。(あてはまる番号すべてに○)

図3-2-1 子育ての悩み



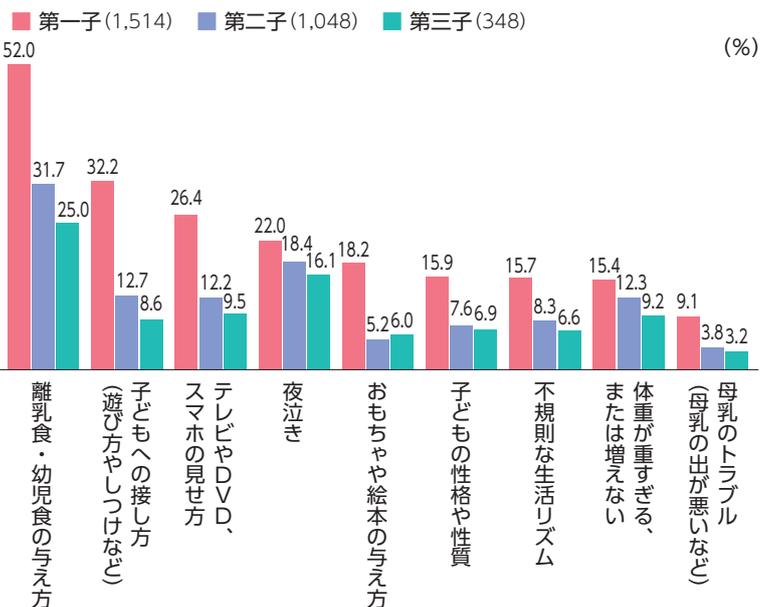
※ 複数回答

図3-2-2 子育ての悩み(月齢3区分別・母親)



※ 複数回答
 ※ 低月齢と高月齢で5ポイント以上差のあった6項目を図示
 ※ 月齢区分の低月齢は0歳6か月～0歳9か月、中月齢は10か月～1歳1か月、高月齢は1歳2か月～1歳5か月である
 ※ 母親の回答

図3-2-3 子育ての悩み(子どもの出生順位別・母親)



※ 複数回答
 ※ 第一子と第三子で5ポイント以上差のあった9項目を図示(「特にない」を除く)
 ※ 第三子までを図示
 ※ 母親の回答

父親の平日の子育て時間は、約7割が「2時間未満」。休日は個人差がある。

平日の子育て時間は、父親の43.6%が「0分」または「1時間未満」、30.8%が「1～2時間未満」であり、「2時間未満」が約7割を占めている。一方、母親は71.6%が「10時間以上」である(図3-3-1)。母親は休日も約8割が「10時間以上」であるが、父親は22.0%が「2～4時間未満」、19.4%が「4～6時間未満」、19.1%が「6～10時間未満」と個人差がある(図3-3-2)。また、父親が子育てに関わる時間が長いほうが、母親からみて「配偶者(父親)と子育てや家事をよく助け合っている」と思う傾向や、父親自身が「子育てによって自分も成長していると思う」と感じる傾向がみられた(図3-3-3～4)。



以下にあげる時間は、1日あたり平均してどれくらいですか。子育て時間は、あなたが対象のお子様と一緒に過ごす時間(睡眠時間は除く)をお答えください。

図3-3-1 平日の子育て時間

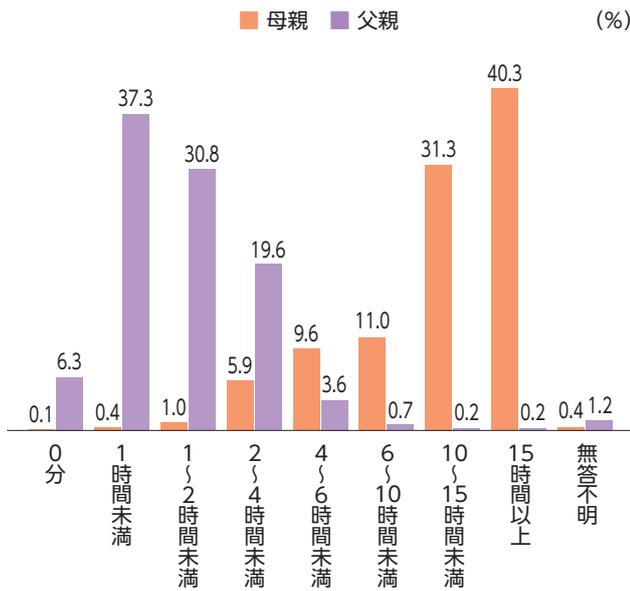


図3-3-2 休日の子育て時間

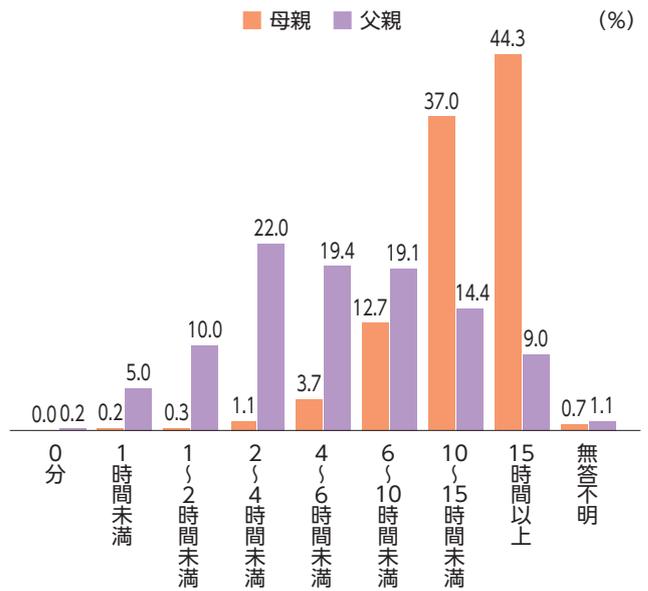


図3-3-3 配偶者(子どもの父親)と「子育てや家事をよく助け合っている」(平日の父親の子育て時間別・母親)

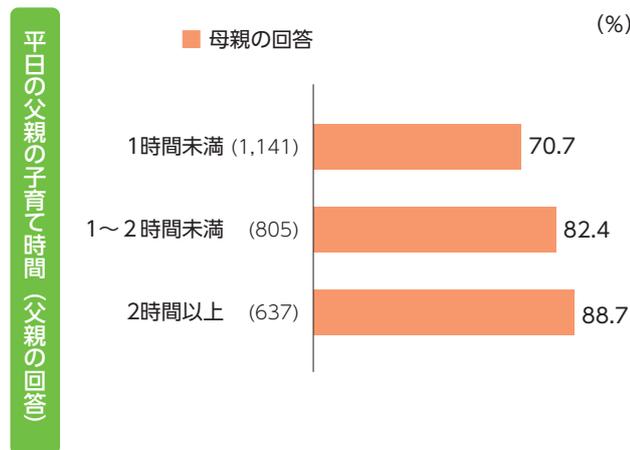
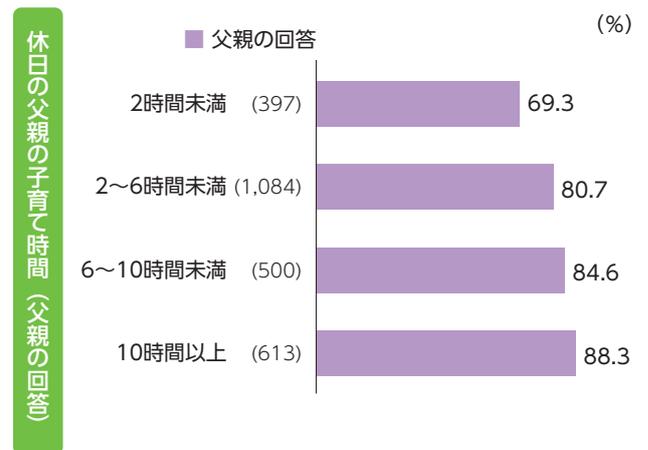


図3-3-4 「子育てによって自分も成長していると思う」(休日の父親の子育て時間別・父親)



※ 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」
 ※ 「1時間未満」は「0分」 + 「1時間未満」。「2時間以上」は「2～4時間未満」 + 「4～6時間未満」 + 「6～10時間未満」 + 「10～15時間未満」 + 「15時間以上」

※ 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」
 ※ 「2時間未満」は「0分」 + 「1時間未満」 + 「1～2時間未満」。「10時間以上」は「10～15時間未満」 + 「15時間以上」

平日、自由に過ごせる時間は、母親・父親ともに半数以上が「1時間未満」。休日はやや増えるものの、「3時間以上」の比率は母親7.3%、父親26.3%と違いがある。

平日の家事時間で割合が高いのは、母親では「2～4時間未満」(41.9%)、父親では「30分未満」(40.6%)である(図3-3-5)。母親は休日あまり変わらず、41.0%が「2～4時間未満」である。父親は28.0%が「30分～1時間未満」、24.3%が「1～2時間未満」と平日より長くなるものの、31.7%は「0分」または「30分未満」である(図3-3-6)。平日の自由な時間は、母親・父親ともに半数以上が「1時間未満」である(図3-3-7)。休日、自由に過ごせる時間は平日よりも母親・父親ともに長くなる傾向があるが、「3時間以上」の比率は母親7.3%、父親26.3%と19ポイントの差がある(図3-3-8)。家事・子育ての負担感や、「自由にできる時間が十分にとれない」という気持ちは、母親の6～8割が感じている(図3-4)。

3.

0-1歳児の母親・父親の子育て意識、生活

Q 以下にあげる時間は、1日あたり平均してどれくらいですか。

図3-3-5 平日の家事時間

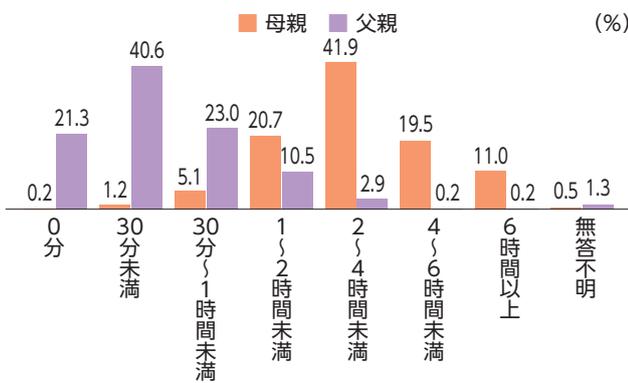


図3-3-6 休日の家事時間

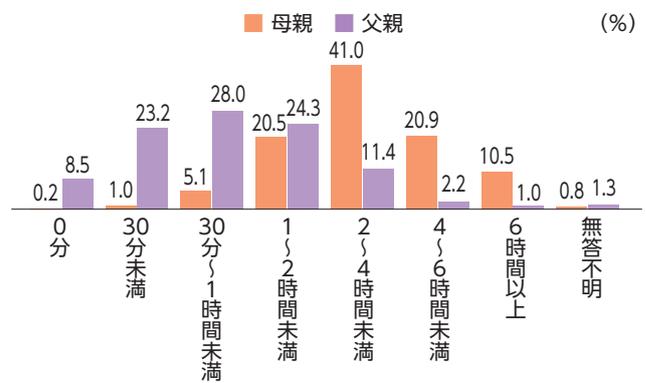


図3-3-7 平日の自由な時間

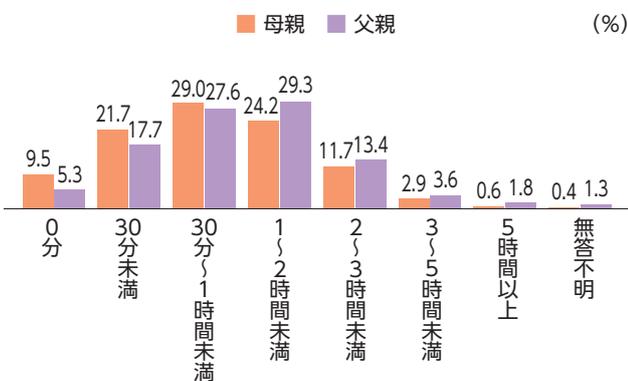
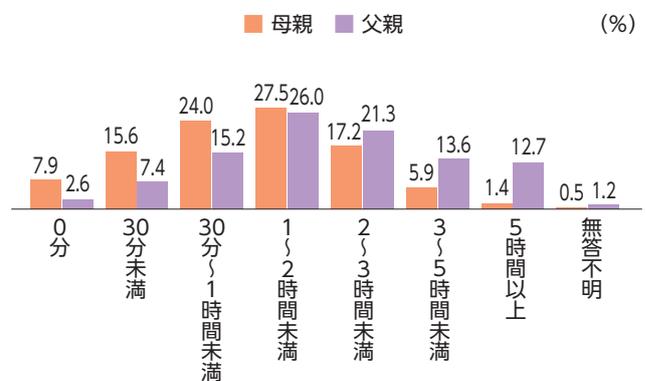
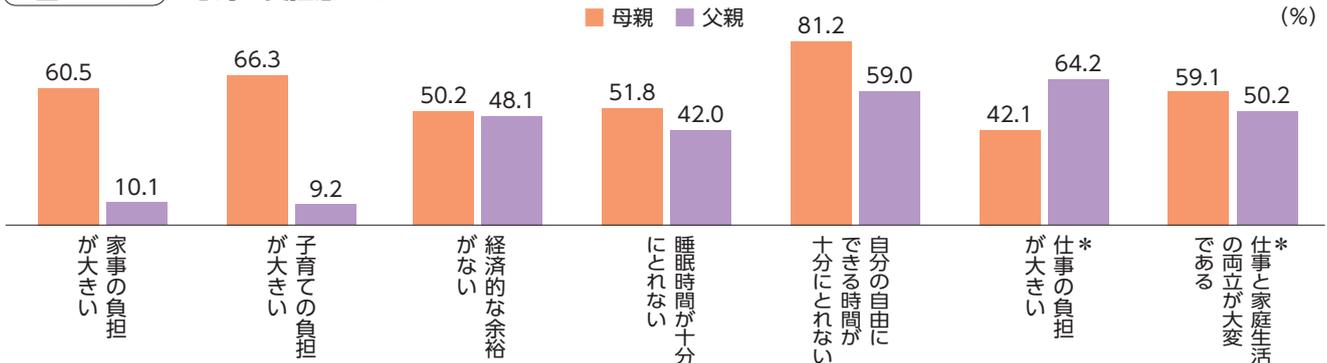


図3-3-8 休日の自由な時間



Q 現在のあなたの状況について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図3-4 心身の負担感など



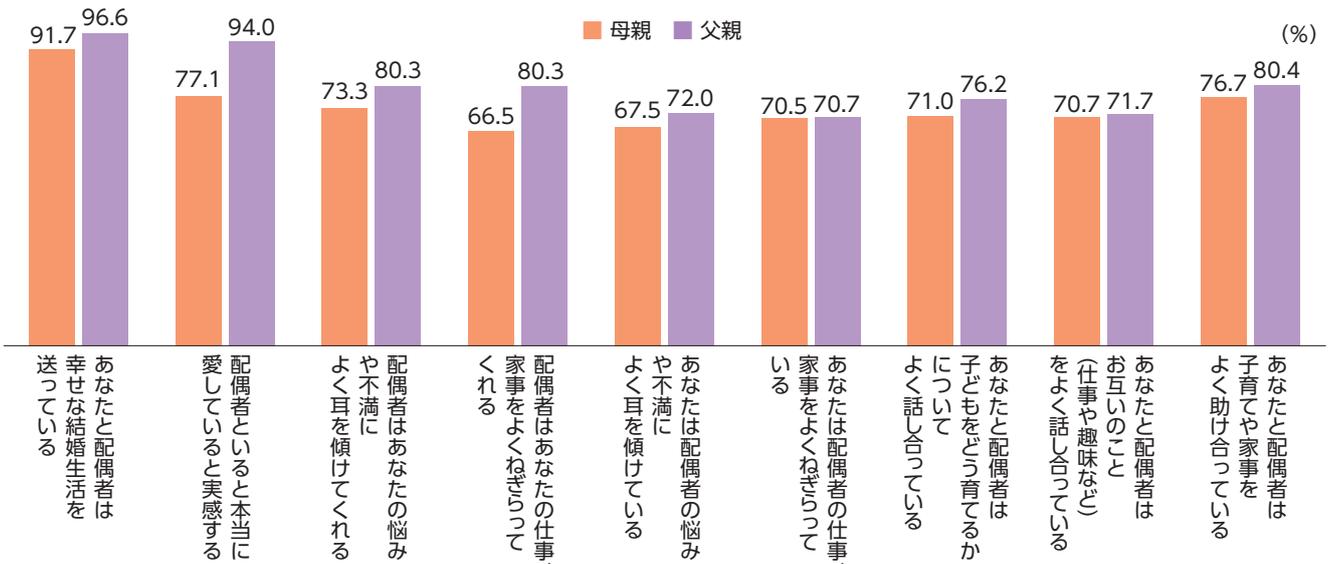
* 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」 ※ *の項目は「休職中」「無職」を除く、就労している母親847人、父親2,564人の回答

夫婦関係は総じて良好であり、幸福感は9割を超える。「配偶者」といって本当に愛していると実感する」は、母親と父親の間で差がみられる。

母親の91.7%、父親の96.6%は、配偶者と「幸せな結婚生活を送っている」と評価している。また母親の76.7%、父親の80.4%は、配偶者と「子育てや家事をよく助け合っている」と感じている。一方で、「配偶者」といって本当に愛していると実感する」については、母親77.1%、父親94.0%であり、約17ポイントの差がみられた(図3-5)。子育てで頼りになる人については、母親は上位から「あなたの親族」84.2%、「配偶者」83.9%、「子育てを通してできた友人」65.6%であった(図3-6)。生活全体の幸福感は、母親・父親ともに90%を超える(図3-7)。

Q あなたと配偶者のことについてうかがいます。

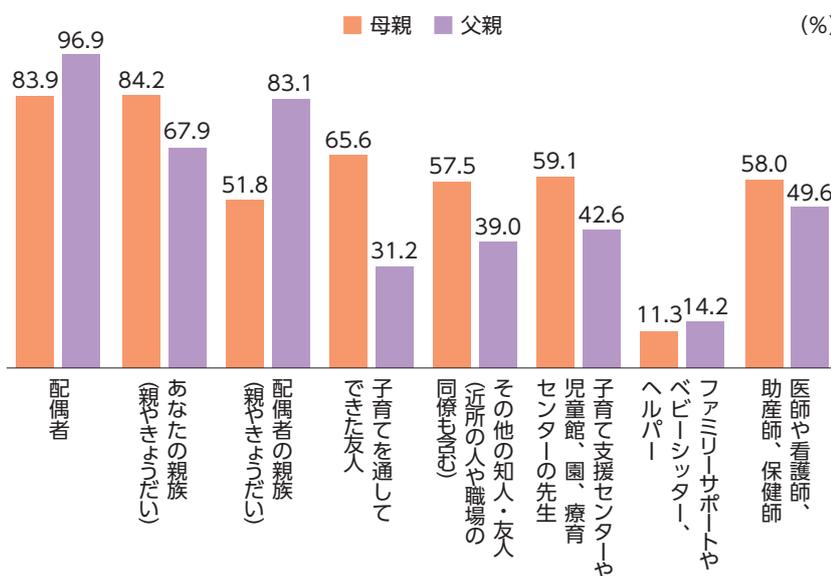
図3-5 夫婦関係



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」 ※ 配偶者がいる母親 2,915人、父親 2,582人の回答

Q 子育てを支えてくれる人(悩みを相談したり、子どもを預けたりできる人)として、以下の人はどれくらい頼りになりますか。

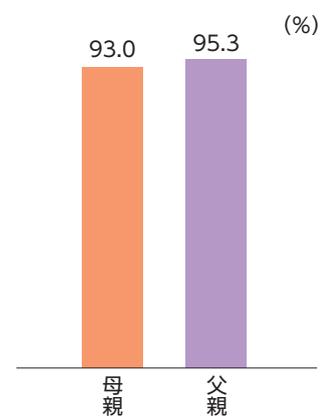
図3-6 子育てで頼りになる人



※「とても頼りになる」+「まあ頼りになる」

Q 全体として、あなたの生活はどれくらい幸せですか。

図3-7 幸福感



※「とても幸せである」+「まあ幸せである」

父親の約4人に1人は、「週60時間以上」働いている。また約3割は、21時以降に帰宅する。職場に「定時に帰しやすい雰囲気がある」と回答した父親は42.6%。

就労している父親の週あたりの労働時間は35.2%が「40～50時間未満」、29.1%が「50～60時間未満」であり、23.4%は「60時間以上」であった(図3-8-1)。帰宅時刻は、19時台が21.3%と最も多いが、21時台以降も30.8%いる(図3-8-2)。職場環境については、「定時に帰しやすい雰囲気がある」と答えた父親は42.6%と半数に満たない。また「子どものことで休みをとったり、早退しやすい」、「部下が子育てに時間を割くことに、上司は理解がある」はいずれも約6割であった(図3-8-3)。

3.

0-1歳児の母親・父親の子育て意識、生活

Q あなたご自身についてうかがいます。

図3-8-1 父親の週あたりの労働時間

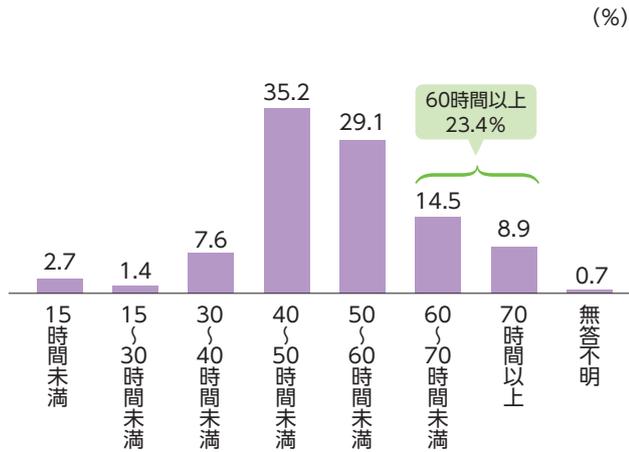


図3-8-2 仕事がある日の父親の帰宅時刻

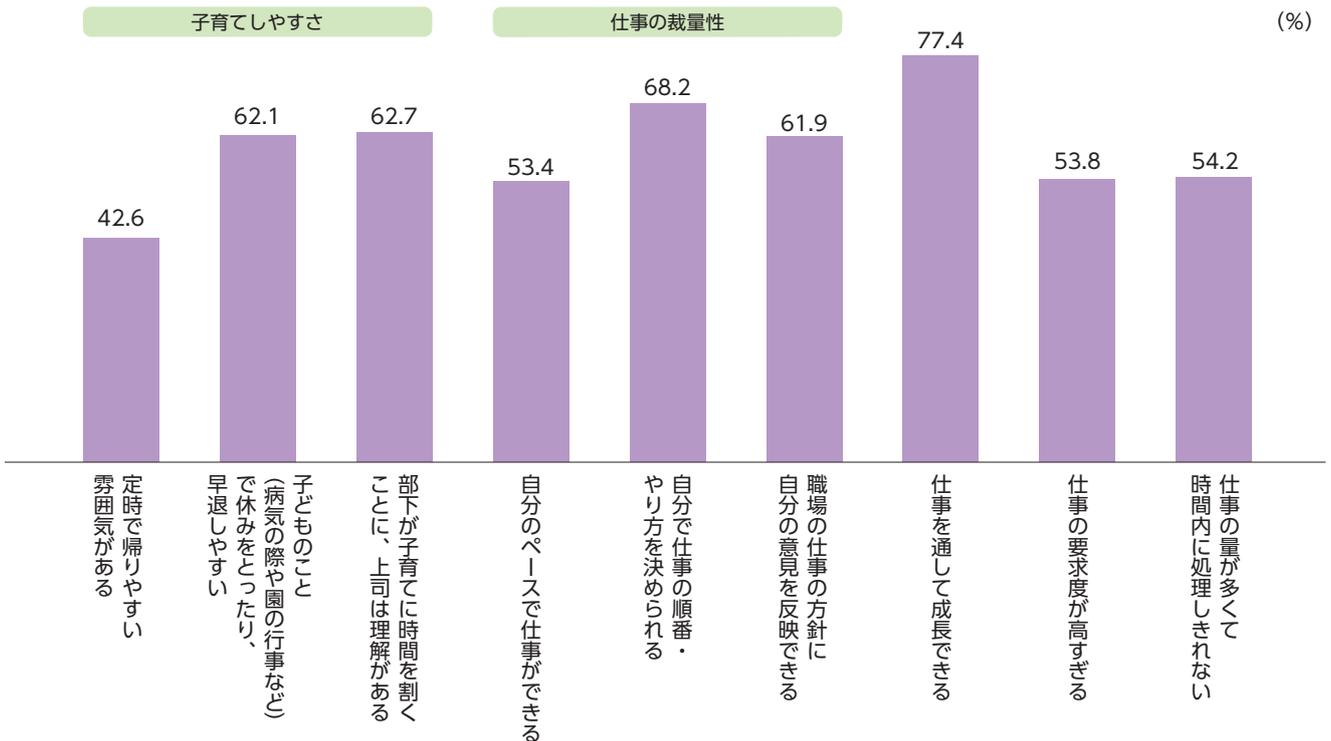


※「休職中」「無職」を除く、就労している父親 2,564 人の回答

※「休職中」「無職」を除く、就労している父親 2,564 人の回答

Q あなたの職場では、以下についてどれくらいあてはまりますか。

図3-8-3 父親の職場環境



※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」

※「休職中」「無職」を除く、就労している父親 2,564 人の回答

母親の45.5%は子どもを「あと1人以上もつ予定」、28.6%は「もっとほしいが難しい」。

これから子どもをもつ予定について、「あと1人の予定」と答えた母親は36.0%、「あと2人以上の予定」は8.4%、「希望する性別の子どもが生まれるまでもつ予定」は1.1%であり、合わせて45.5%であった(図3-9-1)。子どもが1人いる母親の56.1%は「あと1人の予定」であるが、子どもが2人いる母親では42.2%が「0人(もっとほしいが難しい)」であった。母親は父親よりも「もっとほしいが難しい」とより感じている傾向もみられた(図3-9-2)。難しい理由は、母親・父親ともに上位から順に「子育てや教育にお金がかかるから」「子育ての身体的な負担が大きいから」「子育てと仕事の両立が難しいから」であった(図3-9-3)。

Q あと何人、子どもをもつ予定ですか。

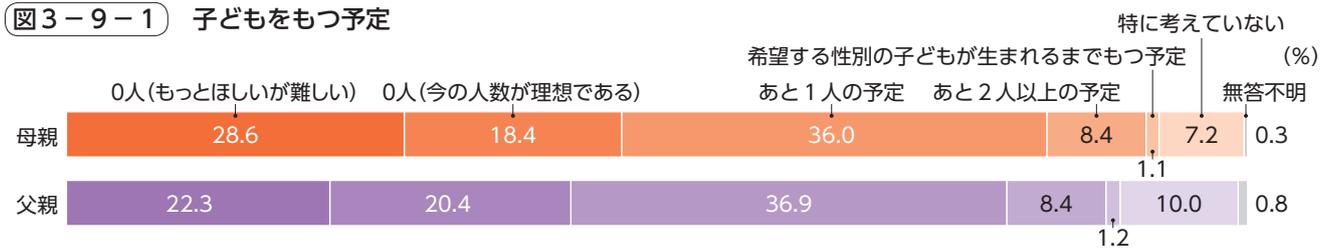
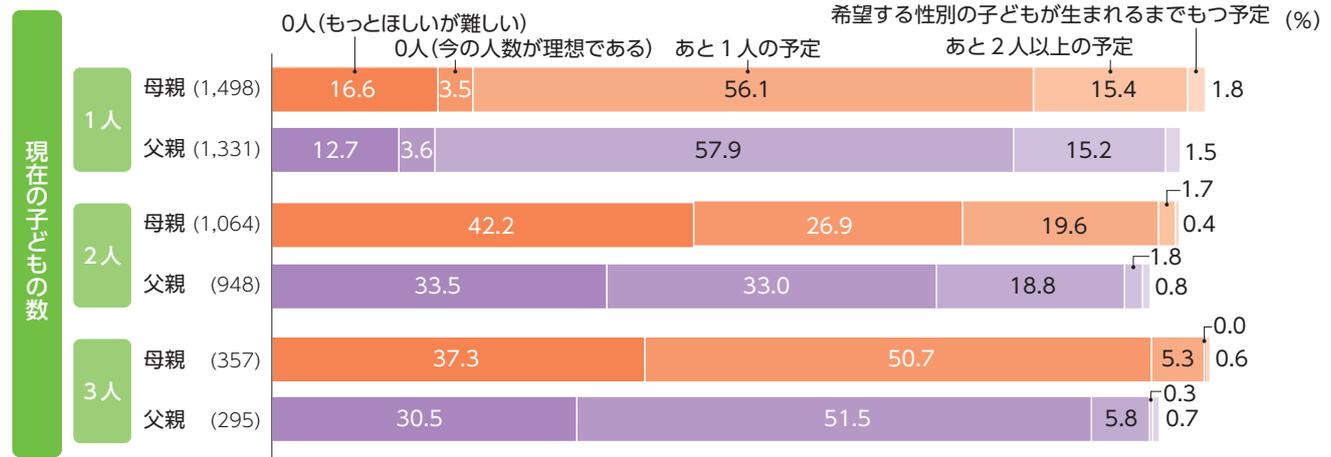
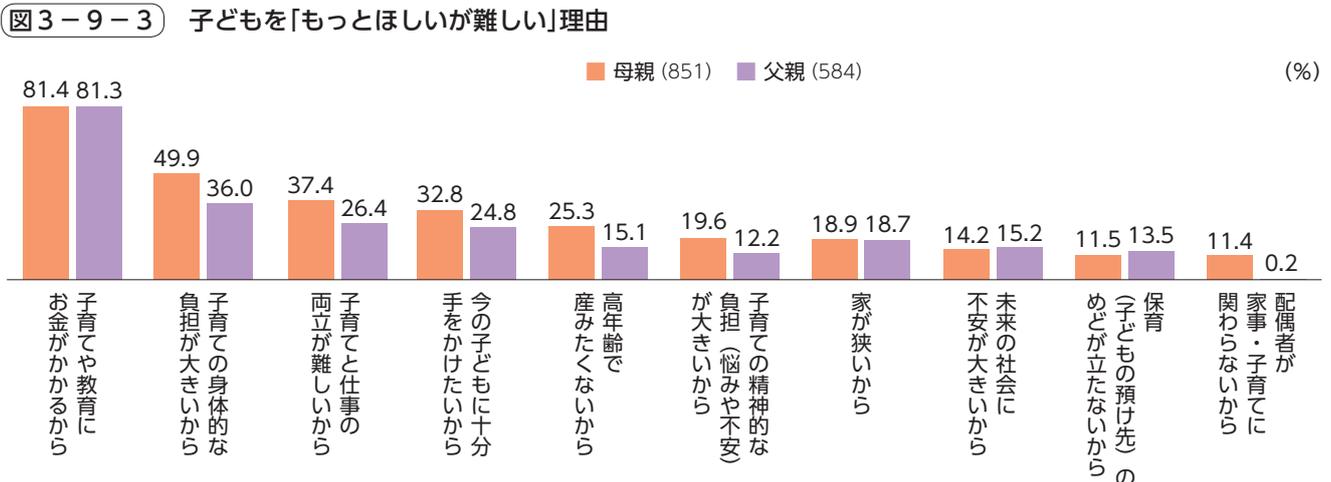


図3-9-2 子どもをもつ予定(現在の子どもの数別)



※ 「特に考えてない」、無答不明は省略
 ※ 現在の子ども数が3人までを図示

Q 「0人(もっとほしいが難しい)」を選んだ理由としてあてはまる番号すべてに○をつけてください。



※ 「0人(もっとほしいが難しい)」を選んだ人のみ ※ 18項目のうち、母親の上位10項目を図示
 ※ 複数回答

「子育てと仕事を両立しやすい社会である」と思う母親は9.3%、父親は17.0%と低い。子育てしやすい社会にするために、「子育て・教育にかかる費用の軽減」「子育てと仕事の両立支援の充実」「保育の量と質の充実」が必要という回答が多い。

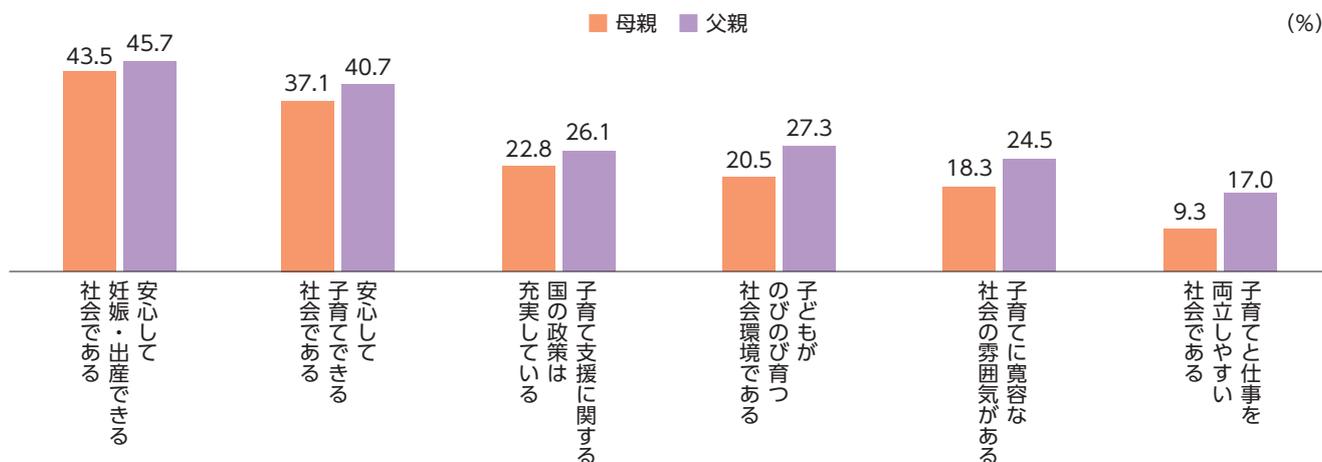
3.

0-1歳児の母親・父親の子育て意識、生活

今の日本の子育て環境に対する評価は厳しい。図3-10であげた項目のいずれも、「そう思う」(とても+まあ)比率が半数に満たない。特に低かったのは「子育てと仕事を両立しやすい社会である」(母親9.3%、父親17.0%)、「子育てに寛容な社会の雰囲気がある」(母親18.3%、父親24.5%)であった。母親のほうが、全体的に評価が低い。また子育てしやすい社会にするために今よりもいっそう必要だと思うことについては、母親の上位から順に「子育て・教育にかかる費用の軽減」(81.7%)、「子育てと仕事の両立支援の充実」(75.8%)、「保育の量と質の充実」(71.9%)であった(図3-11)。

Q あなたは今の日本の社会について、以下のことをどれくらい思いますか。

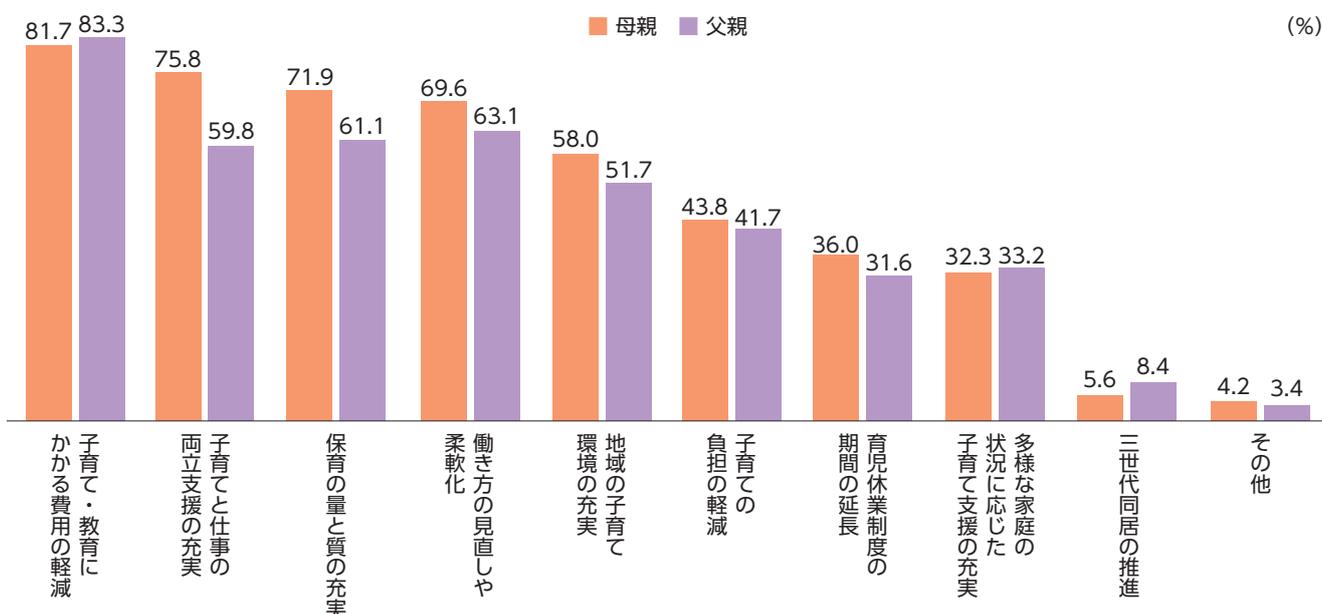
図3-10 社会に対して感じること



※ 「とてもそう思う」 + 「まあそう思う」

Q 安心して子どもを産み育てやすい社会にするために、今よりもいっそう必要だとあなたが思うものは何ですか。(あてはまる番号すべてに○)

図3-11 子育てしやすい社会にするために必要だと思うこと



※ 複数回答

秋田 喜代美 (東京大学 Cedep センター長・教授)

本プロジェクトには、3点の特徴があります。第一に、3,000組近くのご家族に対して両親それぞれの子育てへの関わりを調べることで子育て最初期の夫婦のあり方を明らかにしていくこと、第二に、生まれ月を1か月ごとにほぼ同数のサンプルにしたので、月齢別に0～1歳児期の育ちと子育ての悩みの変化が見えてきていること、第三に、子どもの就園の有無や出生順位、保護者の就労の有無や地域等、できるだけ多様な方々の中での共通性や相違を継続的に調べられる調査となっていることです。

本調査は子どもと保護者の家族システム全体を縦断的に調査分析していく予定です。子どもが0歳時点から、その後回答者がどのように家族形成や子育てをしていくのかも今後の調査で次第に明らかになっていきます。私どもの調査が、ご協力いただくご家族とともに、日本の子育ての今を最初期から捉え、子育てする社会にとってよりよいあり方を皆で考える大事なエビデンスになっていけば、うれしい限りです。

遠藤 利彦 (東京大学 Cedep 副センター長・教授)

妊娠・出産を肯定的に受け止めている夫婦が大半ですが、うれしくても、出産後における現実の子どもの世話には、特に母親が相当の負担感を抱えているようです。そうした状況で、夫婦間において、子育てや家事などをいかに助け合うかが大きな意味を有していることが見てとれる結果になっています。また0～1歳児期においては、まだ生活リズムの個人差がかなり大きいようです。養育者が子どもの生活環境にしっかりと規則性や一貫性をもたせる中で、子どもが徐々に生活リズムを確立していけるように心がけたいものです。メディアの利用に関していうと、スマートフォンの使用が少ないという結果は、少しホッとできるものかと思えます。0～1歳児期での子どもの心の発達には、母親や父親といった周囲の他者とどれだけ双方向的なやりとりができるかということと密接に関連しています。散歩しながら子どもに様々な刺激にふれさせる中で、また絵本を読み聞かせしながらそのストーリーや絵に注意を促す中で、子どもとの表情や言葉を介した豊かな相互作用を楽しみたいものです。

野澤 祥子 (東京大学 Cedep・准教授)

本プロジェクトでは、0～1歳児期の親の生活や意識について興味深い知見が得られました。父親の子育てへのかかわりを見てみると、平日の子育て時間が2時間未満の父親が約7割を占め、母親との不均衡は依然として大きいことが明らかとなりました。しかし、休日の子育て時間にはばらつきがあり、4割程度の父親は6時間以上子育てにかかわっています。日々、乳児と向き合う時間が長い母親の子育てを支援するのは、無論、重要です。一方で、父親が子育てで不安を抱える場合があることも踏まえつつ、乳児期からの父親の子育てを支援するあり方を検討することも必要です。

また、子育てを取り巻く社会についての親の意識では、特に「子育てと仕事を両立しやすい社会である」とへの評価が低かったです。子育てしやすい社会にするために、多くの親が「子育て・教育にかかる費用の軽減」のみならず、「子育てと仕事の両立支援の充実」や「働き方の見直しや柔軟化」を挙げています。少子化が深刻化する日本において、ワーク・ライフ・バランスを実現できる社会の重要性が、親の意識から改めて浮き彫りになったといえます。

ベネッセ教育総合研究所の web サイトのご紹介

この冊子と詳細な調査結果、

ベネッセ教育総合研究所が行った他の調査結果をダウンロードできます。

ベネッセ教育総合研究所

検索

<https://berd.benesse.jp/>



ベネッセ教育総合研究所では、各研究室の調査研究レポートと、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、大学の教職員を対象とした情報誌を web サイトに掲載しています。

また、ベネッセ教育総合研究所の研究員による、最新の研究知見や園・学校現場の声をふまえたオピニオンも公開しています。

発行日：2018年6月20日

発行人：谷山 和成

編集人：高岡 純子

発行所：(株)ベネッセコーポレーション

ベネッセ教育総合研究所

東京都多摩市落合1-34

企画・制作：ベネッセ教育総合研究所

デザイン：(株)ジー・アンド・ピー (表紙：但馬あやの)

© ベネッセ教育総合研究所／無断転載を禁じます。 8TT001-S

